一之瀬珈琲店奮闘中／混戦中

もなか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
一之瀬珈琲店奮闘中／混戦中

【Ｎコード】
Ｎ６４８６Ｙ

【作者名】
もなか

【あらすじ】
元義兄の珈琲店を住み込みで手伝う失業中の克馬は、居候仲間の卯月に恋している。だが、卯月は店主で作家の一之瀬（ぎしん）義信に夢中。それぞれ、意中の相手との距離を縮めようとするのだが…
「一之瀬珈琲店営業中」の続編です。ＢＬ要素あり。まったりした日常話がお好きな方・冗談が分かる方へ。「奮闘中」全６章＋「混戦中」全４章（他サイトからの転載）。
※評価・レビューは受け付けておりません。感想は歓迎♪
※無断転載・リンク等はご遠慮ください。

1章・前編

面接から帰ると、店の様子が変だった。
普段あまり使われていない来客用の駐車場に大きな車が停められており、庭にいる黒柴のマメ吉がワオンワオンと狂ったように吠えている。
いつもは庭に回って家の玄関から入るところを、何だか気になったので真っ直ぐ店の入口に向かった。
引き戸を開けると何人かの男が長髪を頭の後ろで束ねた黒ずくめの男――店主の一之瀬義信（ぎしん）――とにらみ合っていて、僕の顔を見た卯月（うづき）ちゃんがカウンターの中から「克馬（かつま）！」と助けを求めるような声を上げた。
まさか、地上げ屋？
剣呑な雰囲気におののいていると、男たちが僕のほうを振り返り、一人が「お客さんが」と言いかけたので、「家の者です」と答えた。
「とにかく、改装はしませんから、お引き取りください」
義信が苛立ちをにじませた声音で言うと、男の一人が「では、またいつでもご連絡ください」と言い残し、ぞろぞろと出て行った。
「何、あの人たち」
呆気にとられて卯月ちゃんに訊くと、「ＴＶの人と、建築士の人」と消え入りそうな声で答える。
は？　ＴＶ局と建築士？
「あれだよ、『激烈ハウスリカバリ』の下見みたいな……」
思い出した。最近卯月ちゃんが気に入っている住宅改造番組だ。家と一体になっていれば店舗や教室もかまわないという。でもそれが何で。
「卯月！　店主に黙ってリフォーム申し込むバカがどこにいる！」
義信の一喝で謎は解けた。卯月ちゃんは義信に内緒で番組に応募していたのだ。なんてこった。

「ごめんなさい先生……俺、店がちょっとでもきれいになったらいいと思って」
「いいんだよ、このままで。ったく、明日から取材だってのに……」
義信はカウンターをぴしゃりと叩くと、居住部分につながっているドアを乱暴に開け、足音も高く二階の仕事場へと上がっていった。
この〈一之瀬珈琲店〉の店主であるだけでなく、ホラー小説の作家でもある義信は、小説の取材のため三泊四日で奈良と伊勢に行くことになっているのだが、それまでにやっておきたい仕事が思うように進んでいないので、気が立っているのだろう。
「克馬……どうしよう」
卯月ちゃんは小さな体をさらに縮こまらせて、カウンターの中にしゃがみ込んだ。
「俺、出て行けって言われるかな」
「大丈夫だって。赤福買ってきてくれるって言ってたじゃないか」
義信は何だかんだ言って卯月ちゃんを可愛がっているのだ。何かあったわけではないのだから、そんなに怒ってはいないはずだ。
気付いたら外のマメが静かになっていた。たぶん「帰れ！」というつもりで吠えていたのだろう。
「豆大福買ってきたから、コーヒー淹れてよ」と言うと、卯月ちゃんは「大福！」といそいそと立ち上がった。犬と同じくらい食べ物に弱い。僕は客のようにカウンター席に座った。
「面接どうだった？」
「んー、ダメっぽい。でもいいんだ、不動産屋じゃないし」
ふうん、と言いつつ卯月ちゃんは僕の前にコーヒーのカップを置いた。今日の面接は言ってみれば失業給付をもらうための形だけのものなので、別に不採用でもかまわない。こんなことを言うと不謹慎かもしれないけれど。
勤めていた不動産屋が倒産し、姉の元夫である義信の珈琲店に住み込みで働くようになってから早三ヶ月。再就職も不動産屋を希望しているが、今のところ求職活動ははかばかしくない。今日行った

会社も中古車販売業で、万一採用されても勤める気はなかった。
「赤福か」
卯月ちゃんが大福を食べながら呟いた。この店では客がいないと平気でこういうことをやる。
卯月ちゃんは義信の自称書生なので、取材に同行したがったのだが、「赤福買ってくるから、おとなしく留守番してろ」と言われたのだ。どうやらそれが不服のようだが、僕は卯月ちゃんと二人きり――義信の息子（で僕の甥）のヒロがいるから正確には違うけれど――という状況に内心ワクワクしていた。
好きな人と一緒に暮らす、というのは、普通は恋愛の最終段階で起こることだが、僕の場合出会ったその日からここで一緒に暮らしている。こんなことは人生で初めてで、告白はしたものの、どうやって進展させたらいいのか分からない。おまけに卯月ちゃんにとって僕はまだ友達で、義信にぞっこんなのだから。
「関西に住んでる作家に会うとか言ってたけど、どんな人かなあ」
「おっさんじゃなかったっけ？」
「それは分かってる。どんなおっさんかが重要なんだよ。はあ、俺はここにいるだけだから、知り合う人なんて限られてるけど、先生は取材とか対談とか色々あるから、色んな人と知り合うよなあ」
このように卯月ちゃんは、義信と接する身内以外の全人類にジェラシーを感じるほど、彼に夢中なのである。バツイチ子持ち、変人の中年男のどこがそんなにいいのか分からないが。
「色んな人って、卯月ちゃんのお父さんとか？」
卯月パパは日本画の画家で、彼の絵が義信の本の表紙になったのが縁で卯月ちゃんは義信と知り合った。
「そう、親父……あー、先生、親父のこと好きだったらどうしよう」
危うく僕はコーヒーを噴くところだったが、液体は無事喉を滑り落ちていった。
「いくらなんでも、それは」
卯月ちゃんの思考は時として過激である。

「分かんないよ。恋愛に性別も年齢も関係ないもん」
卯月ちゃんはじっと僕の顔を見つめた。顎の辺りまであるサラサラの栗色の髪に、色素の薄い大きな二重の目、細く高い鼻梁に、歯並びのよい口元。僕は先ずこの美貌に参ってしまったのだ。性別を二の次にして。可愛い声に似合わない強烈な発言の数々すら、そのギャップゆえに僕を魅了する。
「そうだな……」
しかし、やはり卯月パパと義信という組み合わせは考えたくないので、僕は話題を変えた。
「あのさ、そんなにリフォームしたい？　俺、これはこれで味があっていいと思うよ。昭和っぽいっていうの？　あの番組ってよく大改造してるけど、昔からの常連さんは変えてほしくないんじゃないかな」
この店は古い。カウンターの中など多少は直してあるが、建物そのものは今年三十五歳の義信より年上である。それにしても、応募したいと言っていたのはついこの前だったような気がするのに、もうＴＶ局が見に来るなんて、卯月ちゃん、「したい」と言った時には実は応募したあとだったのではないだろうか。
「そう？　昭和っぽいんじゃなくて昭和のまんまなだけじゃん。壁を貼り替えるだけでも明るい印象になっていいですよって、建築士の人は言ってたけどな」
卯月ちゃんは義信がカウンターの上に叩きつけていった、建築士の名刺を取り上げてもったいなさそうに見た。
「いや、この年季が入って木が飴色になってるのがいいわけ」
母がこの店で働いていたので子どもの頃にもよく来ていた僕は、当時から変わらない古めかしい感じが気に入っている。昔を知らない人だってこういう雰囲気が懐かしい感じがして好きという人がいるはずだ。
卯月ちゃんは見て、と僕にＡ４の紙を差し出した。ホームページからプリントアウトしたものらしく、カフェの写真が載っているも

のが二枚。一枚はカントリー調、もう一枚は北欧風とでもいうのだろうか。どちらも女性に好まれそうなお洒落な雰囲気だ。
「こんな感じにしたほうがお客さん来ると思うんだけど」
ううむ。やはり卯月ちゃんは木を見て森を見ないところがある。
「……ここの蕎麦屋みたいな外観に、中がこれって合わなくないか」
あっ、と卯月ちゃんは声を上げた。
「そこまで考えてなかった」
やっぱり。
「前もって相談してくれたらよかったのに」
「驚かせたかったんだ。TV局から電話かかってきた日に言おうと思ってたんだけど、先生は忙しそうで言いにくかったし……」
そう言うと卯月ちゃんは、先生……と、また悲嘆に暮れ始めた。
「旅行があってよかったじゃないか。帰ってきたら今日のことなんてどうでもよくなってるよ」
「そうかな」
「そうだよ」
着替えてくる、と僕が席を立つと、卯月ちゃんは僕のスーツ姿をまじまじと見つめ、「なんか、キリッとして見える」などと言った。そんなことを言うから、期待してしまうんですけど。
翌朝、洗面を済ませて台所へ行くと、卯月ちゃんとヒロが騒いでいた。
「虫、ゴキブリじゃない虫がいるよ」
ヒロが大発見をしたとでもいうように、ゴキブリホイホイを指差している。まだ五歳の幼稚園児には毎日が驚きと発見の連続のようだ。ネズミ捕りにネズミがかかっていたのを見つけた時には大騒ぎだったし（飲食店なので嫌でもゴキブリやネズミとはお近づきになってしまう）。
「ホントなんだ、見たことないヤツ」
卯月ちゃんまでそんなことを言う。
「……幼虫だろ」

そこに、義信が眠そうな顔をして入ってきた。
「幼虫？」
「そ、カブトムシにもクワガタにも幼虫がいるだろ。ゴキブリにも幼虫がいるの」
朝から勘弁してくれ。ろくに寝てないのに。義信の顔にはそう書いてあった。
「すぐ、朝食にしますから」
「頼む。な、ヒロ、ちゃんといい子でお留守番するんだぞ」
「うん、卯月ちゃんと寝るから大丈夫」
なーにー。
「克馬、ヤカン」
いけない、沸騰させるところだった。美味しいコーヒーを淹れるには、湯を沸騰させてはいけないのだ。
「ヒロ、お風呂は俺と入ろう」
二十歳近く年下の幼稚園児の甥に嫉妬するという大人げないこと極まりない状態になりつつ、僕は言った。
「うん」
ヒロは僕の気持ちになど気付くはずもなく、無邪気に答え、義信と一緒に居間に向かった。

僕が義信を車で駅まで送っていき、卯月ちゃんがヒロを幼稚園のバスに乗せに行くと、家の中は静かになった。洗濯機の稼働音だけが勇ましく響き渡っている。
開店準備をしながら、これから三日間卯月ちゃんと二人きりなのだということに、僕は秘かに興奮していた。
「ヒロと寝るの？」と卯月ちゃんに訊くと、「克馬も一緒に川の字で寝る？」と笑った。
「そうする」
ヒロがいるんじゃ下心も何もないが。
「今までは一之瀬のおばさんに預けてたんだって。でもぐずったり

して大変だったみたいだよ」
一之瀬のおばさんとは義信の母でヒロの祖母だ。おじさんが脳梗塞で倒れてから店を義信に任せ、近所に持っていた土地にバリアフリーの家を建ててそちらに住んでいる。
「そりゃ、小さいもんな」
「でも俺たちが来たから淋しくないんじゃない」
「だったらいいけど」
さっきは一瞬嫉妬などしてしまったが、僕ももちろん甥っ子は可愛い。姉が幼い息子を置いて出て行ってしまったという負い目もある。なぜ姉のことで自分が負い目を感じなきゃいけないのかよく分からないが。

1章・後編

開店から一時間ほどたってようやく、本日一人目のお客さんが現れた。

「卯月ちゃん、久しぶり」

「いらっしゃい、萩原さん」

二十代後半から三十前後くらいに見えるその男性は、慣れた様子でカウンターに座ると、僕を顎で指すようにして、誰？　と卯月ちゃんに訊いた。その仕草から、あまり好きな感じの人じゃないな、と僕は思った。

「佐々木といいます。一之瀬さんの親戚で……」

僕は萩原さんと呼ばれた男性客に、常連さんたちにしてきたのと同じ自己紹介をした。

「へえ、親戚なんだ」

彼は興味なさそうに言い、コーヒーを注文した。僕が淹れる準備をしようとすると、「卯月ちゃんに淹れてほしいんだ」と言った。

「ああ……はい」

僕も卯月ちゃんも思わず顔を見合わせてしまった。何にせよ、感じが悪い。だいたい卯月ちゃんを「卯月ちゃん」と呼ぶとはなれなれしい。いや、ヒロがそう呼ぶせいなのか、常連さんも皆そう呼んでいるのだが……。「北川」と名字を書いた名札などもつけていないし。

卯月ちゃんがコーヒーをドリップしている間、僕はこっそり萩原氏を観察した。軽くカラーリングしている髪やラフな感じの服装からして、勤め人ではないように思われた。そもそも平日の午前中にこんな住宅街の中の店にコーヒーを飲みに来ているのだし。義信と同類の匂いがする。

彼は卯月ちゃんに熱い視線を送っていた。卯月ちゃんはここにいても知り合う人なんて限られていると言い、年配のお客さんが多い

ので僕も油断していたが、お店である以上不特定多数の人が訪れるわけで、こういうふうに卯月ちゃんに下心を持って通ってくる客がいても不思議ではない。
しかしもう二ヶ月以上になるのに、この人を一度も見たことがなかったのはなぜだろう。突如出現したライバルに、僕は尋ねた。
「僕、四月から店に入ってるんですけど、お会いするのは初めてですよね」
「ああ、忙しくてしばらく来れなかったからね。そうだ、卯月ちゃん、これお土産」
萩原は僕のことなど本当にどうでもよさそうにして、カウンターの上に菓子折りらしきお土産とやらを差し出した。
「ありがとうございます。何だろ」
「あとで食べてよ」
餌付けする気だ。卯月ちゃん、そんな男の持ってきたものは犬にでも、そう、マメにでもくれてやれ！　と思ったが口には出せず、僕は妙に疎外感を感じさせられつつ、阿呆のように突っ立っていた。なぜこういう客が来た時に限ってマメは吠えないのだろう。庭の犬小屋で寝ているのだろうか。
「義信さんは？」と萩原が思い出したように訊いた。このいけ好かない男はやはり義信の知り合いらしい。
「先生は小説の取材旅行で今日から奈良と伊勢に行ってるんです」
「小中学校の修学旅行みたいだね」
「違いますよ、先生は歴史とか民俗学とかにも詳しいから、明日香とか伊勢神宮とかそういうところに行くんです。どんな話書くのかまだ聞いてないけど、むやみやたらに気持ち悪かったり怖かったらいいっていうB級ホラーとは違うんですよ」
卯月ちゃんは力説した。義信の悪口は卯月ちゃんにとって地雷だ。萩原、勝手に自滅してくれ、と僕は黒い願いを抱いた。
ふうん、と適当に相槌を打ちつつも、萩原はにこにこして卯月ちゃんの話を聞いている。可愛くてたまらないといった表情だ。僕も

こんな顔をして卯月ちゃんを眺めていたりするのだろうか。
「失礼ですが、萩原さんはどのようなお仕事を？」
「カメラマン。写真家って言いたいけどね、そこまでじゃ……そうだ、卯月ちゃん、ここで俺の個展やってくれないかな？」
萩原はとことん僕と会話する気がないらしい。
「えー、先生に訊かなきゃ分かりません。壁の面積そんなにないし」
リフォームは義信に黙って申し込んだくせに、卯月ちゃんはにべもなく言った。もしかすると卯月ちゃんもあまり彼が好きではないのかもしれない。
「やるなら使用料がっつりもらわないといけませんね。ニットカフェ以上に」
卯月ちゃんに追従して冷たくそう言ったが、萩原は気にしていない様子で、ニットカフェ……と呟いてから、「ここ、もっと多目的に使わないともったいないよ。コーヒー豆だけ売ってるような店よりだいぶ広いんだし。そうだな……」と、店内を見渡した。
一階の半分近くを占めている店舗は、確かに豆だけ売ってるような店よりはそれなりに広い。席は現在テーブル四脚とカウンターだけだが、一部を雑貨を売るスペースにしていて、手作り雑貨の委託販売をやっているほか、ニットカフェと称して編み物教室も行われている。やっていることがことごとく主婦テイストなのは、義信が考案したのではなくおばさんが知り合いに頼まれたりして始めたからだ。
「一之瀬義信の怪談カフェなんてどうかな。義信さんがホストで怖い話して、参加者も全員怖い話しなきゃいけないっていう、百物語みたいな」
何じゃそりゃと思ったが、卯月ちゃんは「それ、面白そう」と身を乗り出した。
「先生怪談大好きだから、いいかもしれない」
「でも、夜中に開けるのはどうかと……。うちは小さい子だっていますし」

「時間帯なんかはマスター次第ってことでさ。別に徹夜でやらなくてもいいじゃん。早めに告知しといて夏休みにやれば、小説家志望の学生とか、若い子が遠くからでも来るかもよ？」
「若い子……」
自分以外の若い子が義信に懐くのが嫌な卯月ちゃんは、一転して気難しい表情になった。
「忘れなかったら先生に言っておきますよ」
「よろしく。もし実行するなら俺も発案者ってことで参加するから」
この件は彼が帰った三秒後に忘れたい。それより早く帰ってくれないだろうか。そろそろ昼食にしたいのだが。
そう思っていると、やっと別のお客さんが来て、萩原も腹が減ってきたのか、「帰るよ」と腰を上げた。ここが普通の喫茶店みたいにランチもやっていたらきっと居座られたと思うから、コーヒーだけで本当によかったと僕は思った。

夜は三人で食卓を囲んだ。義信がいない夕食は何だか変な感じだった。彼がいつも座っている座布団の上がぽっかり空いているのを見て、昔、姉が専門学校に進学して一人暮らしを始めた時、ダイニングテーブルの姉の席が空いているのに違和感を覚えたことを僕は思い出していた。
ヒロは淋しがる様子を見せることもなく、僕の作ったカニ玉を喜んで食べていた。
「俺、こういうの作ると絶対にグチャグチャになるんだよなあ。スクランブルエッグだろ、ってくらい」
味付けは悪くないのに何を作ってもグチャグチャにする天才、卯月ちゃんも美味しいと言って食べている。最初は義信がやたらと僕の料理ばかり褒めるものだから嫉妬してくれて、料理しないでほしいのなんのと突っかかってきたりもしたのだが、今では「克馬のごはんが一番美味しい」と言ってくれるので、上手く乗せられてる気がしないでもないがついつい卯月ちゃんの好物を作ってしまったり

する。僕は別に前から料理が得意だったわけではないが、ここに来て腕を上げたような気がする。
だが、店の仕事もしなければならないので適度に手を抜いている。もう一品のおかずは出来合いの餃子だ。しかし卯月ちゃんたちが「ここの餃子美味しいよね」「おいしー」と喜んでいるのでよしとする。気が付けば僕の分はほとんど残っていなかった。
卯月ちゃんが洗い物を始めると、廊下に置いてある電話が鳴り、夜は家の中にいれているマメが吠えた。「電話！　電話！」と言っているみたいだ。訓練したわけでもないのに電話をとるとぴたりと鳴きやむので、本当に賢い。
「分かったよマメ。……はい、一之瀬です」
「克馬か。俺」
相手は義信だった。向こうも夕食を食べたところらしい。
「レンタカー借りたんだけど、もー参った。奈良って一方通行でもないとこで道がすげえ狭いの。対向車来たら正面衝突じゃねえのってくらい。まー一応保険は入ってるから、もし俺が殉職したらあとはよろしく」
すでにほろ酔いなのか、縁起でもないことを言う。
「ヒロ、パパだよ」
ヒロを手招きして受話器を渡すと、「ごはん食べた」「今から克馬とお風呂入るの」などと喋っている。なぜか「動物園」という単語も聞こえた。この前遠足に行ったばかりだと思ったが、幼稚園の行事で動物園に行くのだろうか。
「電話、先生から？」
タオルで手を拭いていた卯月ちゃんが、目の色を変えて廊下に出てきた。電話に出ると、「先生がいなくて淋しい」などと言っている。十二時間前に一緒に朝食を食べていたのに。萩原に言われた「怪談カフェ」は忘却の彼方なのか、それについてはひと言も触れなかった。

子どもと風呂に入ったことがないのでどうすればいいのだろうととまどいつつも、カッパみたいなシャンプーハットを被せて髪を洗ってやったり、湯船に浸かって一緒に数を数えたりして何とか任務完了し、俺けっこういい父親になりそう、でも卯月ちゃんが相手だと繁殖は出来ないよなあと愚にもつかないことを考えた。

バスタオルで体を拭いてやりながら「卯月ちゃんとお風呂入ったことある？」とヒロに訊くと、ないと答えたが、念のために「卯月ちゃんとはダメだよ」と釘を差しておいた。ヒロは「うん、だって、たぬきだもんね」と素直に答える。義信が「卯月の正体は俺が山で助けたたぬきだ」と教えたために、信じているのだ。ヒロは聞き分けがよく賢そうではあるが、まだ幼い。

二階に上がり、義信とヒロの部屋に入ってヒロの布団だけを敷き、自分の布団は部屋から持ってきた。二階の部屋はここが一番広く、三枚布団を敷いても大丈夫そうだった。

横になってヒロの幼稚園の話などを聞いていると、風呂から上がった卯月ちゃんが、チェックのパジャマ姿で入ってきた。その姿ももちろん可愛い。

卯月ちゃんは押し入れを開けると当然のように義信の布団を出して敷き、そこへ潜り込むと犬のように匂いを嗅いで、「ああ、先生の匂いがするぅ」と身悶えした。はっきり言って変態っぽいが、自分も卯月ちゃんの布団で同じことをやりたいと思ってしまった。

電気を消すとヒロが唐突に、「卯月ちゃんはパパと結婚したいの？」と言い出した。

「えっ」

たまにヒロは大人をぎょっとさせるようなことを言う。この前も母の日の似顔絵に卯月ちゃんを描くと言って僕らを驚かせた。

「えーと、でも、それは無理というか」

「たぬきだから？」

「ん……まあ、ね」

卯月ちゃんが肯定するとヒロはそれで納得したのか、「おやすみ」

と目を閉じた。それに合わせてしばらくたぬき寝入りをしていたら、卯月ちゃんが僕に囁きかけた。
「克馬、起きてる？」
うん、と眠ってしまったヒロを起こさないように息のような小声で答える。いったい何だろうと、心拍数が上がりかける。
「俺、子どもなんて苦手だと思ってたんだけど、ヒロは可愛くて」
「ああ」
「先生の子どもだと思うと」
さいですか。
卯月ちゃんは自称ヒロの母でもあるが、「もしいじめられたら俺に言うんだぞ。そいつを簀巻にして荒川に流してやるからな」などと母親なら先ず言わないような物騒なことを言っていたのを僕は知っている。
「俺もヒロは可愛いよ。甥っ子だし。生まれた時、自分と血がつながってる子どもなんて何かすごいなって思った」
義信と姉がどのようにしてヒロを生み出したのか、具体的に考えたくはないが。
「あ、そうか……克馬、叔父さんなんだよね。叔父さんって柄じゃないから、ついつい忘れちゃうなあ」
柄じゃないって……姉と年が離れているだけなのだが。
「最近若いうちに甥や姪が出来るって人が少なくなってるからじゃないかな」
「そうだね。俺なんて上いないから、そんなの出来るとしたら十年後くらいかもっと先だと思うなあ」
卯月ちゃんには弟が一人いて、まだ高校生らしい。卯月ちゃんに似ていたらさぞや美少年であろうと思われるが、「似てない。不細工」などと言っている。でも、ちょっと見てみたい。
静かになったと思ったら、卯月ちゃんは眠ってしまったようだった。
僕はこんな早い時間に眠ることが出来ず、かといって抜け出すの

もはばかられて、しばらく輾転反側していた。

2章・前編

義信のいない一日はつつがなく終わった。
朝、三人分ではなく二人分のコーヒー豆を挽いていると、ヒロが「卯月ちゃん、たぬきにならなかったね」と僕に言った。寝ている間たぬきに戻るのではないかと思って楽しみにしていたのだという。いやはや、子ども相手の嘘はサンタクロースくらいにしておいたほうがいい。
台所に入ってきた卯月ちゃんが食パンをトースターにセットし、目玉焼きを焼き始めた。
「俺、一人暮らししてて気付いたんだけど、食パンってメーカーによってカビが生えやすいやつとそうじゃないやつがあるんだ」
卯月ちゃんは世紀の大発見をしたような誇らしげな顔をしていた。
「じゃあ、関東の食パンは六枚と八枚だけど、関西のは四・五・六だって知ってた？」
「えっ、ホント？　四と五なんて分厚いじゃん。どうすんのそれ、フレンチトースト用？」
「関西の人は厚いパンが好きらしい。八枚なんてサンドイッチ用？　って言うらしいぞ」
「サンドイッチ用は十枚だって。えー、先生、大丈夫かな」
「美味しいパンなら厚いほうが焼いた時中がふっくらしていいけど。でも、食パンなんか食べてないかもよ。和食っていうか、あっちの名物食べてんじゃないの」
「伊勢とか奈良の名物って何？　伊勢海老？」
そう言えば、伊勢海老以外何も知らない。
「水が合わなかったりしてないかなあ」
たかだか違う地方に行ったくらいで、卯月ちゃんは義信が火星にでも行ったみたいに心配している。僕が北極に行ってもこの半分も心配してもらえるだろうか。

昼食を食べたあと店に出ると、卯月ちゃんの「今オーナーがいないから分かりません」という声が聞こえてきた。
一応まともな応対も出来るようだ。ここにはお客さん以外の人も色々来るのだが、宗教の人に「天使と交信出来る」と言って追い返したり、地元のケーブルＴＶが来て（卯月ちゃんがリフォームを申し込んだ番組の局とはまた別）「この辺りに伝わるたぬきの伝説を知っているか町の人にインタビューしてるんですけど」と言うのに、「たぬきは俺です」と言って追い返したり、その言動はかなりトンチキなのである。
「さっきの人は？」
「商工会議所の人。何の用か知らないけど」
なるほど、卯月ちゃんなりに相手を見ているらしい。
「商店会とか入ってるからじゃない」
「そっか」
そうしているところに、客が来た。何と、昨日も来た萩原ではないか。
いらっしゃいませと言う僕には目もくれず、萩原は「やあ、卯月ちゃん」とレジ横に立った卯月ちゃんの顔を見つめた。
だが、ちょうどよかった。卯月ちゃんはこれからお昼なのだ。
「じゃあ、卯月ちゃん、休憩してよ」
「なら、一緒に昼飯食いに行こうよ」
えっ、と僕と卯月ちゃんは同時に声を上げた。何ですと。
「ほら、前に美味しいのかなって言ってた坦々麺の店、行ってみた？」
「行ってないけど……」
「じゃあ行こう。俺、朝遅かったからまだ昼飯食ってないんだよね。あそこけっこう美味いよ」
「ホントに？」
「ホントホント」

どうやら、卯月ちゃんは坦々麺に心が動いている様子だ。今日は義信がいないので手抜きをして、昼食を二人ともカップ麺で済ませることにしていたのがいけなかった。そりゃカップ麺より坦々麺食べたいよな。僕は腕によりをかけて昼食を作らなかったことを後悔した。

「じゃ、行きます」

卯月ちゃんがカウンターから出てくると、萩原はその腕を取るようにした。まったく、なれなれしい。エプロンが……、と卯月ちゃんが言うと萩原は卯月ちゃんの背後に手を回し、ダンスでターンさせるようにしてくるりとエプロンをはぎ取った。外したエプロンを投げ寄越されて、僕はわなわなと震えた。

二人が出て行ったのと入れ替わりに、薬屋のじいさんが入ってきた。近所に住む昔からの常連さんの一人で、卯月ちゃんのファンでもある。

「卯月ちゃん、坦々麺食べに行くんだって？」

じいさんはいつも座っている席に着いて僕に言った。

そうです、と答えながら、僕は萩原に比べればじいさんなんて可愛いもんだった、と思っていた。じいさんは来る度に卯月ちゃん可愛いね、などと言って話し相手にしたがるので僕は内心エロじじいめ、などと思っていたのだが、今は卯月ちゃんがいなくともコーヒーを注文してくれるハゲ頭のじいさんが仏のように見える。

「あの店けっこう美味いんだ。見た目は小汚いけどなあ。まあ、今どきどこも建て直す余裕なんてなかなかないからなあ」

そうなんですか、と相槌を打ちつつ湯を沸かす。卯月ちゃんたちが向かった店は僕も時々前を通ることがあるが、かなり古そうで、ガラス戸から透けて見える店内は常に薄暗く、店全体に長年の油汚れが染みついているような感じだった。卯月ちゃんは「薄汚い店」などと失礼なことを言っていたが、義信がわりと美味いと言っていたので自分も行きたがっていた。

くそ、萩原め。僕だってまだ卯月ちゃんと二人きりで外食なんて

したことないのに。
「ごゆっくりどうぞ」
僕はじいさんにコーヒーを出すと、懇願するように言った。
「そのうち卯月ちゃんも帰ってきますから」
「そうだな、帰ってくるまで待たせてもらうよ」
遅かったら携帯を鳴らしてやろうと思ったが、卯月ちゃんが携帯を持って出ていないことに気付いて僕は肩を落とした。
僕が差し出した新聞を適当に見ているじいさんと世間話をし、豆を買いに来たお客さんの応対などをしていると、卯月ちゃんたちが帰ってきた。
「どうだった？」と訊くと、「まあまあ」だという。
「卯月ちゃん、卯月ちゃん」とじいさんが卯月ちゃんを手招きするので、萩原は怪訝そうな顔をしてカウンターではなくじいさんが座っているのよりひとつ奥のテーブルに座った。
「ご注文は」
僕はにこやかに萩原に訊いた。いくらこいつが厚かましくても他のお客さんの邪魔は出来まい。
「ブレンド」
「かしこまりました」
唸るくらい美味いのを淹れてやる、と僕の中で闘争心に火が点る。
萩原はじいさんが卯月ちゃんとひとしきり喋り終えるのを待ってから、頃合いを見計らって「卯月ちゃん」と自分に注意を向けさせ、「写真、見せてあげるよ」と持っていたファイルを示した。
コーヒーを席まで持っていったついでに、僕もなんとなく輪に加わる。
ファイルに収められていたのはＡ４ほどの大きさに引き伸ばされた風景写真だった。どこか知らないが、桜が咲き乱れている。
「おー、見事なもんだねえ」
じいさんが身を乗り出し、声を上げた。
「ええ、これが仕事ですんで」

萩原、目上の人間には如才ない。つまり、僕は完全に舐められているということか。どんどん萩原が嫌いになっていく。
じいさんは行ったことのある場所を見つけたらしく話が弾んでいる。仙台とか青森とか言っているので東北らしい。
萩原がファイルのページをめくっていくと、見慣れた顔が現れた。マメだ。店の前にいると思しきマメが、カメラのレンズを見上げている。
「これ、すごく可愛い」
卯月ちゃんが感心したような声を上げた。悔しいが同感だった。今までおばさんや卯月ちゃんがたくさんマメの写真を撮ってきたが、しょせん素人、ここまで上手く撮れているものはなかった。
「見たよ、この店が載った『シバだいすき』。正直カメラマンいまいちだよね。俺だったらもっと上手く撮ったのに」
マメとこの店はこの前柴犬特集の犬の雑誌に掲載されたのだが、こんなことを平気で言うとは、萩原、すごい自信だ。
「そうですか？　可愛く撮れてたと思うけど……あ、でも、先生の写真が小さくて……」
いや卯月ちゃん、飼い主は大きく載らなくてもいいんだって。
「あんまり男前に写ってなかったし」
それは被写体に問題があるのでは。
「店の中はさ、こういうふうに撮ってほしかったよね」
萩原がさらに写真をめくると、カウンターに立つ卯月ちゃんが現れた。表情がやや硬いが、写真の中でもやはり美しい。卯月ちゃんの背景になると、古ぼけた店内まで二割増によく見える。
「あっ、俺だ。そう言えば撮られたんだ」
「よく撮れてるじゃないか」
じいさんも褒めている。その写真、欲しい。僕は心から思った。ただし萩原の撮ったものでなければの話。
「あげるよ、それ」
「え、俺の写真？」

「いや、ファイルごと全部」
お礼を言う卯月ちゃんの顔は若干とまどい気味に見えた。
「ブログにもさ、犬じゃなくてもっと店の写真載せて、卯月ちゃんが日記を書けばいいと思うんだよね」
「あれ俺が書いてるんですけど」
「いや、犬のことでなく店のこと。本当はちゃんとしたサイト作ったほうがいいと思うけどね。写真がいるようになったらいつでも声かけてよ。とりあえずさ、よそのカフェのスタッフブログとか読んでみなよ」
萩原、余計なお世話だが的を得たことを言ってくる。この店のブログはなぜか、「マメ吉の日記」というタイトルで卯月ちゃんが携帯で書いている犬日記なのだ。
卯月ちゃんは不服そうな顔をして曖昧に頷いた。
萩原はじいさんに旅行のパンフレットや雑誌の仕事が多いのだと話し、コーヒーを飲み終えると二人は同時に帰っていった。
残された僕らは、後片付けをしながら何だか呆然としていた。
「あの人って何なんだろ」
僕は素朴な疑問から言った。
「萩原さん？　んー、近所の人？」
店を出たあと車やバイクのエンジン音がしないということは歩いてきているのだろうから、近くではあるのだろう。
「いくつぐらいなのかな」
「三十くらいじゃない」
卯月ちゃんはアバウトに言った。二十一歳の卯月ちゃんから見れば、ある程度年上の人間は皆「三十くらい」で、ある程度中年だと「四十くらい」で、親ぐらいだと「五十くらい」なのではないだろうか。子どもから見た大人が皆おじさんやおばさんであるように。だが、僕の見立てでも萩原はそのくらいに見えた。ちなみに、二十四歳の僕のことは「ちょっと上かな」と思っていたそうだ。僕はやや童顔の卯月ちゃんを最初は十代だと思っていたのだが。

「三十だったら義信さんの後輩とかじゃないよな。五歳くらい下だと同じ学校だったとしても分かんないし」
「そうだね。そういうのじゃないみたいだよ」
「お節介なこと色々言ってたけど、もしかして営業のつもりなのかな」
「分かんない。どっちにしても先生はサイトなんかいらねー、とか言うに決まってるよ。ブログだって俺が作っていいか訊いたら、好きにすればって言ったし」
　義信は自分の店なのにかなりいい加減なのだ。たぶん小説のことで頭がいっぱいなのだと思う。怪談カフェなんかもきっとやりたがらないだろう。萩原は怪談カフェをやったら自分も参加するとか言っていたが、もしかして心霊写真でも撮ったことがあるのだろうか。
　僕は卯月ちゃんがカウンターに置いたファイルをめくり、もう一度写真を見た。写真のことはよく分からないけれど、どれも悪くない。単純にきれいだと思う。
「アイスランドに行きたいんだって」
「え、薬屋のじいさんが？」
「違うよ、萩原さんだよ。写真撮りたいって」
　アイスランド……どんな国なのかぴんとこない。
「北極みたいなところ？」
「北極じゃないよ。ちゃんと人間住んでるんだから。首都とかは普通の街だし。でも、火山があって、温泉湧いてて、氷河があるんだって」
　火山に氷河。それは北海道を上回る雄大な眺めなのだろう。と、言うか。萩原、男のロマン、みたいな話をして女の子を引っかけようという軽薄男そのままではないか。今時そんなものに引っかかる女性がいるとは思えないが。
「そういうの、いいと思う？」
「悪くはないんじゃない。やりたいことがないよりはいいかも」
　卯月ちゃんの発言に、僕はぎくりとした。

萩原や義信に比べれば、僕はあまりに平凡だ。僕は住宅の間取り図が好きで不動産屋に就職した、普通の会社員に過ぎない。いや、会社が潰れたので現在無職だ。卯月ちゃんはお父さんが画家だし、芸術的な方面の男のほうがいいのかもしれない。義信が小説を書いていなくてただのコーヒー屋でも卯月ちゃんは彼を好きだろうと思っていたけれど、作家である、ということは実は重要事項なのかもしれない。

僕はふてくされたような気分になって、今日はまだ誰も座っていないカウンターを力任せに拭いた。

2章・後編

今夜も義信から電話がかかってきた。意外とまめな性格だったのだなと、僕は少し感心した。

ヒロはいつもと違う状況が楽しいらしく、淋しがらないので助かった。むしろマメのほうがいない義信を探しているような素振りを見せ、エサもそれほど食べていなかったので驚いた。マメ、そんなに義信が好きだったのか。

「あの……萩原さんってお客さん、覚えてます？」

僕はヒロと電話を代わると、声を潜めて義信に言った。

「萩原？　あー、カメラマンだっていう。どうかしたか？」

「いえ、昨日と今日と久しぶりにお店に来てくれて。俺は初めて会ったんですけど」

「個展やらせてくれとか言った？」

「そう、そうなんですよ」

「うち狭いから無理って断ったんだけど、しつこいな。コーヒー飲んでいったり豆買ってくれるから無下には出来ないんだけどな」

「それに、卯月ちゃんになれなれしいというか」

僕がそう言うと、義信は喉の奥で笑うような声を立てた。

「そうか。でも、ストーカーみたいになってるわけじゃなかったら、卯月目当てに通われても文句言えないし、客寄せになるならあいつもちょっとは役に立ってることになるじゃん」

「卯月ちゃんは十分役に立ってますよ」

「ああ、マメより効果あるのかもな」

そう言えば、雑誌に載ってたくさんお客さんが来るかと期待したが、たいして効果はなかった。やはり飲食店の雑誌ではなく犬の雑誌だったからだろうか。

マメが足元にまとわりついてきたので、「マメが淋しがってますよ」と言うと、「お前は？」と訊かれた。何を言ってるんだ、この

おっさんは。
「変な感じはしますね、三人だと」
僕は正直に答えた。思い浮かんだのは、ちょうど今頃の時間、入浴する前の義信が卯月ちゃんに白髪を抜いてもらっているという身も蓋もない光景だったが（一度卯月ちゃんが黒い髪まで一緒に抜いてしまった時、それで藁人形とか惚れ薬とか作ったりするなよ、とホラーなことを言っていた）。
「何かが足りないような」
そうかそうか、と義信は妙に嬉しそうな声を上げた。失業した僕を居候させているのは下心からだ、そう言われたことを僕は思い出し、「ヒロが待ってるんで」とやや邪険に通話を切った。

翌日の木曜日は定休日だったので、店を開けている時より何となく安心して一日を過ごした。休みなら萩原も来ないわけだし、と考える僕はどうやら心が狭い。大体僕はすでに卯月ちゃんと一緒に暮らしているのだ。うらやましいだろう、と心の中で呟くと少し虚しくなった。
食料品の買い出しに出た車の中で、卯月ちゃんが「どっか行きたいな」と言い出したが、あいにくいい行き先を思いつかなかった。せっかくのチャンスだというのに。備えあれば憂いなし、恋の達人であればきっとこういうことも日頃から想定していて即座に対応出来るに違いない。
僕がどっかってどこ、などと言っていると、卯月ちゃんが「克馬が昔住んでたのってどの辺？　行ってみようよ」と提案してくれた。僕は十数年前の小学生の頃、この町に住んでいたのだが、以前の家に行ったことはなかった。
それで記憶を頼りに近所を走ってみたが、僕ら一家が住んでいた五階建ての小さなマンションは見つからなかった。小学校に行って通学路を辿ったりもしてみたが見当たらない。僕が住んでいた時点でかなり古かったから、取り壊されて新しい物件が建ったのかもし

れない。住宅街の中には一之瀬珈琲店のような昔からある家も多かったが、マンションやアパートなどの集合住宅には新しいものも多く、その可能性は高かった。
　同じところをぐるぐる回り、「うーん、思い出せない」と卯月ちゃんには言ったが、一階にコンビニが入っているマンションが場所的に怪しい気がして、僕は何となく胸の内側がざわざわするような感覚を覚えていた。
「ああいう、一階が店とか事務所になってる物件は、下駄履き住宅とか脚貸しアパートとかいうんだ」
「へえー」
　不動産屋の時によくお客さんにしていたトークを卯月ちゃんにもしながら、あれは僕の家のあとに建ったものじゃない、あんなのよくあるじゃないか……そう、自分に言い聞かせていた。自分が昔住んでいた家がもうない、という事実を、受け入れたくないのかもしれない。
「今度、どっかカフェに行こうよ。研究っていうか、視察？」
　卯月ちゃんが僕の胸中など知る由もなく、？気に言った。
「いいね」
　僕は家のことを考えるのをやめ、現在の我が家である一之瀬珈琲店に向かってハンドルを切った。
　帰宅して届いていた郵便物を見ると、月曜に面接を受けた会社から不採用通知が送られてきていた。
「ダメだった」と卯月ちゃんに言うと、「早っ」と目を丸くしていたが、面接なんてそんなものだ。たいていその場で決まっていて、相手の態度で分かる。そう言ったら、卯月ちゃんも「あっ、それは言えてる。バイトでも面接官が嫌な感じの奴だと絶対落ちてる」と納得していた。
　何にしても無職生活はまだしばらく続く。
　金曜の昼間、一之瀬のおばさんが店に来てくれた。おばさんは週

に一、二回、店と家の様子を見に来る。店の経理はおばさんに任せているし、僕と卯月ちゃん二人で家事をやっているとはいえ、なにぶん男所帯なので、あれこれ世話を焼いてくれるのだ。おばさんに言われなければ、僕らはよく脱衣所のマットだとか便座カバーだとか、衣類やタオル以外のものを洗うのを忘れたりする。

おじさんは足が不自由になったものの今はそれなりに元気で、会ったら「美穂ちゃんの代わりに今度は克馬くんが嫁に来てくれたのか」と軽口を叩いていた。嫁は余計です。

「商工会議所の人は何の用だったんですか？」

僕はおばさんに訊いた。今日、この前来た商工会議所の人がまた来たのだ。

「これ」

おばさんは小さな袋に入ったクッキーを僕に示した。

「クッキー？」

「これ、うちに置いてくれないかって。今は息子が仕切ってるから、相談して検討しますとは言ったんだけど」

それで見本を置いていったのか。

昼食を終えた卯月ちゃんが店に出てきて、「何それ」と目を輝かせてクッキーを見た。今日の昼食はおばさんが作ってきてくれたいなり寿司だったせいか、卯月ちゃんはいつもより満足気な顔をしている。

「新しい名物っていうのかしら」

「ああ、昔からあるお菓子じゃなくて、無理矢理名物ってことで新しく作ったやつ」

こんなのも町おこしというのだろうか。しかし、この町のような、都内へ通勤する人たちが住むベッドタウンで町おこしも何もないだろうに。

袋にはやたら目が大きく描かれたたぬきのファンシーなシールが貼られており、「タヌポン」と安直極まりない名前までついていた。市民から募集したのだろうか。このたぬき、商店会のマスコットキ

ャラクターらしい。
「この辺山なんてないのに、何でたぬき……」
「昔は雑木林なんかがいっぱいあって、動物がいっぱいいたのかもね。沼だったところもあるっていうし」
だとしたらいつ頃の話だろう。江戸時代くらいか？
おばさんはソーサーを出して袋の中身をその上に開け、僕らに食べるよう促し、自分もひとつつまんだ。クッキーはたぬきの顔の形をしていた。
「まあまあね」
「別に普通かな」
「ココアのほうが美味しいよ」
僕らは好き勝手な感想を述べ、おばさんに「売れると思う？」と訊かれて顔を見合わせた。
「どうだろ……レジの横に置いてたら豆のついでに買う人はいるかも」と卯月ちゃん。
「コンビニか」
コンビニのレジ横というのは、つい客が手を伸ばしてしまうものだということを聞いた覚えがある。
「あれは季節限定のお菓子なんかが置いてあってころころ商品が変わるからつい買っちゃうけど、ずっと同じものがあっても最初のうちしか売れないんじゃないかな」
「そうよねえ。変わったものならともかく、普通のクッキーじゃねえ……」
「たぬきなら饅頭のほうがいいと思うな。和菓子とコーヒーって意外に合うんだよね」
売れるかどうか分からないものを仕入れる余裕は、どう考えても一之瀬珈琲店にはなさそうだった。
よくコンビニなどに置いてある、無料のクーポン雑誌、あれも何度か断っている。コーヒー豆十パーセントオフとか、コーヒー一杯五十円引きとかのクーポンを載せないかと言われるのだが、義信は

そういうことをすると店のイメージが安っぽくなるからと言って断っているらしい。確かに、本当に美味しい店はああいうものには載っていないことが多い。
それでも店の存在を知ってもらう機会が少しでも増えるのはよいのではないかと思うが、割引にした分を上回る利益が上げられるかどうか考えると、博打もいいところかもしれない。
「義信に断らせようかしら」
おばさんはすっきりした顔になって、朗らかに言った。ペンネームの「ギシン」ではなく、「よしのぶ」と本名で呼ぶところに母親の威厳が感じられる。義信もおばさんにだけは頭が上がらないのだ。

夕方、義信が帰ってきて、僕が駅まで車で迎えに行った。
帰ったぞ、と義信が玄関で靴を脱ぐなりヒロとマメが駆け寄っていって、ヒロは義信に抱きつき、感動の再会を演じていた。やはり少しは淋しかったのだろうか。
卯月ちゃんも抱きつきたそうにしていたが、「土産」と袋をいくつも渡されて、手がふさがったままその光景を眺めていた。
義信不在の四日間、特に変わったことは何もなかったが、僕は彼の顔を見てどこかほっとしている自分に気付いていた。

3章・前編

日曜日、僕ら四人は動物園に行った。
ヒロが電話で義信に「動物園」と言っていたのはこのことだったのだ。いい子で留守番するから、その代わりに日曜日は動物園に行く約束をしていた、というわけだ。
それならば親子二人で行ってくればいいのに、なぜ四人全員で行くのかというと、卯月ちゃんが「俺も行きたい」と言い出したので、自動的に僕も、ということになってしまった。
おばさんが店に出てくれるというので、久々に日曜に外出した。
「パンダ今いないんだよね。中国からもらえないのかなあ。やっぱ国際情勢的に難しいのかなあ。あ、でも国内で繁殖したのをもらえないのかな」
入場ゲートをくぐると卯月ちゃんはチケットを不器用な動作で財布に捩じ込みながら言った。
「犬じゃないから生まれたら一匹くださいってわけにはいかないんじゃないか？」
あ、この台詞前も聞いた気がする。
「だよね、貴重な動物だし……パンダって一回に一匹しか生まないって知ってた？　二匹生まれたら双子だって」
「人間みたいだな」
僕は案内図を二部取ってひとつを卯月ちゃんに渡した。僕らがそうしているうちに義信は「先行ってる」と、はしゃいで駆けだしたヒロを追いかけるようにして行ってしまった。
やった。撒かなくても向こうが勝手に消えてくれた。僕は内心ほくそ笑んだ。
「あ、先生……」
「すぐ追いつくって。どうせ昼メシの時に落ち合うんだし」
卯月ちゃんは僕を、というより僕が背負ったリュックを見た。自

分の分を持ちたがったヒロ以外の、大人三人分の弁当が中に入っている。
「そのリュック、上野じゃなくてアキバにいるオタクみたいだよね」
そう言う卯月ちゃんは美容師が持っているシザーズバッグのような、携帯と財布くらいしか入らない小さなポーチを提げているだけだ。長袖の上に半袖を重ね着しているように見えるフード付きのTシャツに細身のジーンズ姿で、普段店に出ている時とほとんど変わらない格好だが、可愛い。
「しょうがないじゃん。ヒロが動物園で弁当食べたいって言うんだから」
僕はとぼとぼと歩き出した。卯月ちゃんがよりによって花見でもないのに三段重ねの重箱に詰めた弁当が、ずしりと重くなったように感じられる。
「動物園なんて十年ぶりだよ。俺カピバラが見たいな。それと、ペンギンと、レッサーパンダと、ワオキツネザル」
卯月ちゃんはペンギン以外微妙にマニアックな動物の名前を挙げながら、猛禽類の檻に向かって歩いていった。
「携帯だと遠い。カメラ先生が持ってるしなあ」とブツブツ言いながら、フクロウに携帯電話のカメラを向けている卯月ちゃんの手元を見て、僕ははっとした。
「そのストラップ」
卯月ちゃんの携帯にはあの「タヌポン」のストラップがついているではないか。
「これ？　昨日買った」
何でも、「タヌポン」グッズだとか、例のクッキーだとか、地酒だとかといった地元の特産品を売っている店があって、そこで買ってきたのだという。そんな店あったんだ、と僕が半ば呆れ、半ば感心して言うと、場所は僕らが時々行く本屋の近くだった。僕は全然気がついていなかった。店の前で野菜も売っていた、と卯月ちゃんは言った。市内には驚いたことに野菜の無人販売所もあり、大根や

蕪が並んでいたりする。なかなかどうして、僕らの町は奥が深い。

義信たちとはモノレールの駅の手前の休憩所で落ち合った。

すぐ近くに檻のある、卯月ちゃんお目当てのカピバラは昼間は寝ているのか、見ることが出来なかった。

「カピパラ」

「違うな、もう一回」

「カ、カピ、パラ」

休憩所のテーブルの上に子どもの弁当のような中身の重箱を豪快に広げている僕らは、明らかに周囲の家族連れから浮いていた。おまけに「カピパラいない」と言い間違った上げ足をとって、義信が「卯月はカピバラって言えるまで食うな」と卯月ちゃんをいじめている。うなじまである髪を下ろして薄く色のついたサングラスをかけ、変な柄シャツを着ている義信は、日曜日のお父さんとしてはかなり怪しい。

「もういいじゃないですか義信さん、弁当が埃っぽくなりますよ」

「そうだよ、カピバラさんはお昼寝してたんだよ」

若干噛み気味の発音だったが、ヒロのほうがちゃんと言えている。

「じゃあ、食ってよし」なんて言われて、卯月ちゃんはううう、と泣くような声を出して弁当に箸をつけた。

食事を終えると義信が、「こっちは売店のオモチャ見たいとかモノレール並ぶとか子ども動物園で遊ぶとかで時間かかるから先行っていいぞ」と言うので、僕らは再び二人きりになった。義信たちも、たまには親子水入らずというのも良いだろう。

行きたかったら美術館でもアメ横でも好きなところに行けばいいし、先に帰ってもいいと義信は言ったが、僕は空になったとはいえ重箱を背負っているし、なるべく早く帰っておばさんと交代するつもりでいたので、動物園を見終わったらすぐ帰るということで卯月ちゃんと意見の一致をみた。

モノレールには乗らず、橋を渡って東園から西園へと移動する。

象だのライオンだの、子どもが喜びそうな動物はおおむね東園に集中しているが、卯月ちゃんが見たがっている動物は西園に集中している。
ペンギンを見て喜び、ワオキツネザルやアイアイを見るべく表示通りに移動しようとすると、不忍池が目の前に広がっているのを見て、卯月ちゃんは足を止めた。池には橋が架かっている。
「この図、池の中にワオキツネザルがいるみたいに見えるんだけど、何でだろう」
さあ、と僕は首をひねり、とにかく行こう、と卯月ちゃんを促した。
はたしてワオキツネザルは、池の中に設えられた島のようなところにいた。二匹が並んで座ってこちらを見ていて、インドネシアとかの猫の置物に似ている。
「可愛い。夫婦みたいだ」
そう言うと卯月ちゃんは、急に「ひぇっ」と声を上げ、僕の腕をつかんだ。橋が軽く揺れている。前方には走っていく小学生くらいの子どもたちの後ろ姿。そんなに驚くほど揺れただろうか、と卯月ちゃんの顔を見ると、目を見開いて、本当に驚いた顔をしている。
「卯月ちゃん？」
「……俺、実は、こういう池とか橋とか、ちょっと苦手なんだよね」
卯月ちゃんにそんな弱点があったとは。こういうのって何だ？水恐怖症？
「海は平気なんだけど、池や沼は……この蓮みたいな植物とか、何か嫌だし。モネの『睡蓮』とかも好きじゃないし」
わけの分からないことを言って動かない卯月ちゃんと僕を、大学生くらいに見える若い男女のカップルが怪訝そうな目で見て通り過ぎていった。どうでもいいけどその女の子より卯月ちゃんのほうが百倍可愛かった。
「子どもの頃、庭の鯉の池に落ちたとか？」
「うちに池なんかないよ。何でか分かんない。でも見てたらドボン

っていきそうな気がしてくる」
「大丈夫？　引き返そうか」
「平気」と言うので歩き出すと、卯月ちゃんは僕の腕にすがったまま
まついてきた。橋はすぐに終わったが、こんな美味しい思いが出来
るとは。
「先生に電話、いやメールでいいかな、ワオキツネザルの写真撮っ
てくださいって」
地に足が着くと卯月ちゃんは復活し、照れ臭いのか僕の腕から離
した手で即座に携帯を取り出した。周囲に人がいなければ、その背
中を抱きしめたいような気持ちになった。

今週の僕はもしかしたらツイている。
日曜日に動物園でささやかなデート気分を味わったが、定休日の
木曜日には卯月ちゃんと二人でカフェに行くことになった。店が休
みでも家事をやったりヒロのお迎えにも行かなければならないので
時間制限はあるが、それでも二人きりだ。
昼食をどうしようかと義信に訊いたら、適当に食べるから何もし
なくていいと言ってくれたので、心おきなくカフェ巡りが出来る。
一之瀬珈琲店とはまるで似ていないお洒落なカフェでランチをと
りつつ、最近店のことに熱心だよね、などと僕は卯月ちゃんに言っ
た。
「んー、やっぱり、ずっとただの居候ってわけにはいかないと思っ
てさ。先生も困ると思うけど、俺だってずっと無職ってわけにはい
かないじゃん？」
スモークサーモンのカルボナーラスパゲッティを食べ終え、食後
のコーヒーを啜っていた卯月ちゃんは、そこまで言うと声を潜めた。
「……先生と結婚して主婦、ってわけにいかないんだし」
「そりゃそうだ」
卯月ちゃんの小声に反して僕はつい大きな声を出してしまった。
卯月ちゃんは軽く肩をすくめ、「だから、ちゃんと珈琲店やって、

従業員になりたいと思ってるんだよ。もっと繁盛したらちゃんと給料出してもいいって先生言ってたし」と続けた。
「それで、店リフォームしたらいいと思ったんだけどな。リフォームは棚上げにするとしてもさ、萩原さんじゃないけど、今のままじゃ店がもったいない気がしてきたんだ。そりゃ、もっとお客さん来たら忙しくなって、店でのんびりなんてわけにいかなくなると思うけど」
うーむ。卯月ちゃんの言いたいことは分かるが、店に就職なんて、正直現実的でない気がした。確かに、このままずっと居候というわけにはいかない。でも……
卯月ちゃんはずっと一之瀬珈琲店にいたいのだろう。あの店と家の居心地がいいのは僕も認める。就職してもしばらく下宿代わりに住んでいいという義信の好意に、甘えてしまおうかと思っているくらいだ。だが、それは一時的な話だ。第一、卯月ちゃんにとってずっと、ということは、義信をあきらめられないということじゃないか。
「でもさ、お客さん増えなかったら？」
僕は少し意地の悪い気分になってきた。
「それどころか逆に、俺たちを居候させるのもきつい感じになっちゃったら、どうする？」
卯月ちゃんの顔がくもったのを見て、僕は慌ててそんなことにはならないだろうけど、と付け加えた。
「だから、そうならないように、頑張ろうと思ってるんだよ」
「うん、俺もそう思うけど、一人で勝手に考えてもダメだと思う。やっぱり義信さんの店なんだし、もともとはおばさんたちの店なんだから、ちゃんと相談しないと」
諭すように言うと、卯月ちゃんは子どものような動作で頷いた。言葉にしてみると、自分たちの置かれている状況が考えてどうにか出来るものではないことを僕は改めて思い知った。仕事を失った僕らは、店と家事を手伝う代わりにあの家に置いてもらっている。出

て行こうにも仕事がなければどうにもならないし、卯月ちゃんは外で働く気がない。こういうのって、なるようにしかならないのではないか。
「うん、怪談カフェのこととかも先生に言ってみるよ。部外者のアイディアに乗るのはちょっと癪だけど、具体的なことは俺たちで話し合って考えたらいいと思うんだよね」
「そうだね……」
萩原のアイディアに乗るのは嫌だったので、僕はやる気になっている卯月ちゃんには悪いが、義信が却下することを願った。
「俺、巫女さんやメイドのコスプレしてもいいし」
何でそうなる。っていうか、ちょっと見たい。

3章・後編

少し買い物をして二軒目のカフェでケーキセットを食べて帰宅すると、義信が台所に立ってコーヒーを淹れようとしていた。義信は昔は喫煙者だったのだがヒロが生まれる前に煙草をやめたので、口淋しさを紛らわすためかコーヒーやお茶をよく飲む。

「ただいま」

「おっ、お前らいいところに」

コーヒー飲むだろ、といそいそと豆の量を一人分から三人分に増やす義信を見て、僕はなぜか嫌な予感がした。

居間に集まって義信の淹れたコーヒーを飲み、今日外で飲んできたコーヒーより美味いなと思った。

一軒目の店は立地条件のせいかけっこうなお値段だったし、二軒目の店は脱サラしたマスターが新しく始めた店だとかで、奥さんの趣味なのか可愛らしいインテリアだったのだが、味がもう一歩な感じがした。奥さんの手作りだというチョコレートケーキも、僕には甘過ぎる気がしたし。

義信の勝ち。それとも、家で飲むコーヒーだから美味いのだろうか？

「先生、この前は勝手にリフォームなんか申し込んですみませんでした」

説教されるとでも思ったのか、卯月ちゃんが頭を下げた。

「何だ、改まって。そりゃまあ、勝手にリフォームなんて、ありえないけどな」

「店をきれいにしてもっとお客さんに来てもらいたかったんです」

「確かにうちは古いよ。でも改装したからって客が増えるとは限らないぞ」

「はい……それに、克馬が古いのがいいっていう人たちもいるはずだって」

「そう、うちはレトロなのが売りなんだよ。老舗の名店って感じだろ？　克馬、いいこと言うな」
　さっき思いついた、という感じで義信は目を輝かせた。絶対普段はそんなこと思っちゃいない。
「それは置いといて、でも、俺、もっとその……スタッフとして頑張りたいというか、コーヒー淹れるのももっと上手くなりたいし、単に店番って感じじゃなくてカフェスタッフとして一人前になりたいというか」
「前言ってたバリスタとかいうやつか？」
「バリスタ検定は別にいいんですけど、店をもっとちゃんとやりたいというか」
「何で？」
　義信は店主とは思えない気の抜けた返事をした。
「えっ……だって」
「俺もお袋も今のままでいいと思ってるんだけど、もっとって、もっと売り上げ上げたいってことか？」
「ええ……端的に言えば」
「まあ、そうならないとまともに給料も払えないしな。でも卯月、本格的にカフェやりたいんだったら、うちじゃない店に行ったほうがいいぞ。うちなんかほとんど豆屋みたいなもんなんだし」
　卯月ちゃんは自分で掘った墓穴にはまってしまった格好になり、言葉を失っていた。
「あの、そうじゃなくて、俺は、あくまで一之瀬珈琲店を繁盛させたいんです」
　何とか卯月ちゃんがそう言うと、義信はうーん、と難しい顔になった。もしかしたら一之瀬珈琲店は税金対策か何かのためにあまり利益が上がっていないほうがいいのだろうか、と僕は以前から疑っていたのだが、当たっているのかもしれない。
「色々イベントとかもやったらどうかと思うんです。……夏休みに怪談カフェとか」

「怪談カフェ？　何だそりゃ」
「先生が怖い話して、お客さんも俺たちも全員怖い話をするんです。百物語みたいに。照明消して、テーブルにロウソク置いて。俺、巫女さんとかの格好してもいいし、克馬は執事で、先生には和服着てもらって」
「ええっ、俺が執事？」
巫女さんは義信の初期作品のヒロインなので分からなくもないが、なぜ僕までコスプレ。
「似合うと思うけどな」
「おいおいおい、学園祭か」
義信は苦笑いだ。言われてみれば「怪談カフェ」なんて高校生が学園祭でやりそうなレベルのものじゃないか。今度萩原が来たら言ってやろう。
「楽しそうじゃないですか？」
若い卯月ちゃんは、店のことをどこか学園祭の模擬店みたいに考えているのだろう、笑われている理由が分からずにきょとんとしている。
「頑張ろうとしてくれてるのはありがたいんだけどな、言われたことやってくれてりゃ十分なんだよな。それでもすごく助かってるし、ちゃんと給料やれなくて悪いんだけど。働いた分に見合う報酬が欲しいんだったらよそでバイトしてもらうしかないし」
ついに卯月ちゃんの思考回路はショートした。
「違うんです先生、お金のことじゃなくて！　俺、ずっとここにいたいんです。だから潰れたらどうしようとか思って……」
「大丈夫だ、潰れないから」
義信は卯月ちゃんの頭を撫でたが、そんな言葉が当てはまる店や会社が存在しないことは、僕は身をもって知っていた。僕の勤め先だった不動産屋は就職して二年もたたないうちに倒産したのだ。世の中に「絶対」はない。
だが、義信に言われると、なぜかそれは絶対のような気がした。

本業は作家なんかで、珈琲店以上にこの先どうなるか分からない浮き草稼業だというのに、だ。
卯月ちゃんは撫でられて落ち着いたのか、トイレ行ってきます、と立ち上がった。
「どうしたんだろ、あいつ。最近変だよな」
「卯月ちゃんが変なのは今に始まったことでは」
「いや、親父さんが来てからかな、何か挙動不審っつうか」
四月の末に卯月ちゃんのお父さんが鎌倉からやって来たのだが、それ以来様子がおかしいと、義信は言うのだ。
「卯月は入った大学すぐ中退しちゃってさ。違うところを受け直せってずっと言われてるらしいんだよな。仕送り打ち切られて、バイトじゃ生活出来なくてうちに来たわけだが」
「大学行ってたんですか」
それは初耳だ。
「美術系ですか」
「いや、文学系みたいだけど、美術史とかもあって学芸員の単位も取れるような……」
「そういうの、向いてそうですけど」
「でも、本人はやりたくないんだろう。親子の問題だから、俺がどうこう言える筋合いじゃないけど」
何となく分かった。卯月ちゃんは義信のためだけにここにいるように見えるが、親との問題から逃げるためでもあるのだ。それを店のこととすり替えている。卯月パパは画家だが、卯月ちゃんには絵の才能がない。その辺のことも関係しているのかもしれない。
「……なあ克馬、お前これからどうしようかとか考えてたりするか」
「え、それは考えてますよ。再就職出来たらファイナンシャルプランナーを取ろうかと思ってるんですけど。最近不動産屋でも持ってる人がちらほらいるみたいなんで」
義信は何がおかしいのか、ぶっと噴き出した。僕は至って真面目に答えたというのに。

「いや、お前はいいよな、うん」
なんなんだ、自分から訊いておいて。
「怪談カフェね。百物語みたいなイベントってなくはないけど、うちでやったって十人も入れないのにな。しかもコスプレで女装って……考えることはまだまだガキだな」
そこに卯月ちゃんが戻ってきた。
「で、卯月、店を頑張ってくれるのもいいんだけど、お前、書生だよな」
卯月ちゃんが先に話し始めてしまったので後回しにされていたが、そもそも義信のほうが僕らに話があってここに集まったはずである。
「書生です」
書生という語の本来の意味からは外れているが、卯月ちゃんは義信の書生ということになっている。
「書生の仕事をしてほしい」
「何ですか？　何でもします！」
卯月ちゃんはしっぽがあったらぶんぶんと振りそうな勢いで、義信のほうに身を乗り出した。
僕の嫌な予感が再燃した。あまり良いことではない気がする。
「まあ、落ち着け。下読みって知ってるだろ」
「新人賞の応募原稿を編集部が読む前に読む人でしょ」
「そうだ。お前、下読みやってみないか」
「えーっ」
声を上げたのは卯月ちゃんではなく僕だ。
「新人賞ですよね。小説家になりたい人たちがデビュー作になるかもしれない原稿を送ってくるわけでしょう？　その運命が卯月ちゃんに委ねられていいんですか」
卯月ちゃんの文才はブログで証明済みだ。カウンターの隣に伏せて退屈そうにしているマメの写真を撮り、「今日は雨でつまんないなー」とか、そんなことを書いているだけなのだ。小学生にでも書ける文章である。なまじ小学生よりボギャブラリィがあるため、変

な日本語を書いている時もある。
「なんか失礼だな」
「卯月が小説書くわけじゃないからいいんだよ。それに卯月が一番好きな作家は俺だからな。センスは確かだ」
僕が不審の目を向けると、義信は、自分がデビューしたライトノベルの文庫の新人賞がリニューアルされたのだが、編集部が下読みを頼むつもりだった人が一人入院してしまったので代わりを探しているのだと言った。昔のよしみで、「俺はやってる暇ないけど、うちの店に若いのがいるからその子はどうか」と返事してしまったらしい。
「少ないけどバイト料出るぞ」
「やりますやります。いかにも書生の仕事って感じじゃないですか」
怪談カフェのことなどきれいさっぱり忘れ去ったかのように、卯月ちゃんは俄然はりきっている。
「克馬もやりたかったら半分ずつやってもいいぞ。ギャラ半分になるけど」
「いや、俺はいいです。責任重大って感じだし」
一次選考とはいえ、選考は選考だ。そんなことを引き受けるのは、荷が重い。それに僕は理系ではないけれど、答えの出ないものが苦手なのだ。

そして本当に、荷は重かった。
数日後、宅配便で届いた原稿は、予想以上に箱も大きく、受け取ると腕にずっしりと重みがかかった。
何千枚もの紙が入った荷物を卯月ちゃんの部屋に持っていくと、僕から箱を受け取った卯月ちゃんはうぎゃあ、と悲鳴を上げた。
「プ……プリントアウトだから、重いんだよ。だって、本になったらこんだけだもん」
箱を開け、編集者が好意で一緒に送ってくれた今月の新刊数冊のうちの一冊を手にして主張しつつも、卯月ちゃんは早くも涙目にな

っていた。
「上限百枚だから、そんなすごい量じゃないって先生言ってたし」
言わんこっちゃない、と僕は思った。
「半分やろうか？」
「大丈夫だって。あ、でも、間に合いそうになかったらちょっとは頼むかも……バイト料、その分分けるし」
「いいよ、そんなのは。坦々麺奢ってくれるくらいで」
「分かった」
どうせ一本読んで千円とかそんなところだろう。もう少し高かったとしても、たぶん労力に見合うものではない。義信がこっそり僕にそう言っていた。だいたい下読みが読む原稿は大半が落ちる原稿なのだから、読むのも楽しいどころか苦行に近いのだとも。
卯月ちゃんが紙の束を箱から取り出し、次々部屋の床に積んでいくのを、僕はどうするつもりなのだろうと思って眺めていた。
タイトルが大きく印字された表紙には、どれも受付印が押され、四角い枠のようなスタンプも押されていて、読んだ人間が印鑑を押すようになっているらしかった。
卯月ちゃんは全部の原稿を出してしまうと、今度は箱に戻すものと床に置くものとに分け始めた。
「タイトルとかぱっと見て面白そうなのとそうじゃないのとに分けるといいんだって」と僕に説明する。
「分かるの？」と訊くと、「勘」だと答える。
「まあ、頑張って」
きっと自分も読むことになるのだろうな、やれやれ、と思いながら僕は卯月ちゃんの部屋を出た。

翌朝、卯月ちゃんは目の下にクマを作っていた。まったく、美貌が台無しだ。
「まさか、徹夜したのか？」
「ううん。三時くらいには寝た」

「それで、何本読んだ？」
「……一本」
「えっ」
僕はフィルターに豆を挽いた粉を入れると、卯月ちゃんの顔をまじまじと見た。
「一本一時間くらいで読めると思ったんだけど、たまたま最初に取ったのが思ったより読みにくくて、休憩しながら読んでたら時間かかっちゃってさ。後回しにしようかと思ったんだけど、内容忘れちゃいそうだから、意地で最後まで読んだ」
「で、それは……」
「没。当然没。何が何だか分かんなかったし」
苦労して読んで、それが受賞作候補ならいいが、たいていの場合、没。なんだか報われない作業だ。受賞するのは千人に一人みたいな世界らしいから、当然と言えば当然なのだが。
義信によると、新人賞というものは賞によってけっこうやり方が違うらしく、最近ではネットで読者が投票したりするものも増えているそうだが、卯月ちゃんが今回引き受けたものは至ってシンプルで、下読みが読んだものを編集部が選考して受賞者を決めるのだそうだ。作家などの選考委員も一切なし。
「選考委員を頼まれたりしたんじゃないんですね」と義信に訊いたら、「俺はそんなに偉くないからなあ。下読み頼まれかけたくらいだし。でも、プロに下読み頼むと高いから」とかなんとか言っていた。
募集要項を見ると、賞金のところに「書籍化作品のみ、規定の印税」と書かれていた。印税って賞金じゃないんじゃ……と言うと、「賞金なしってことを詭弁でごまかしている」と義信。不況の二文字が脳裏をよぎる。その割に、「キミの才能で世界を変えろ！」と仰々しいコピーが大きく書かれていた。世界の前に他に変えるべきものがあるような気がする。
「ゼミの発表でもあるんですか？」

シャープペンシル片手にカウンターで紙の束をめくる卯月ちゃんを見て、白井さんは言った。最近、卯月ちゃんのこの姿を見て、常連さんたちも「勉強してるの、偉いねえ」などと言うが、何のことはない。

「下読みをやってるんです。ライトノベルの新人賞の」

一心不乱になっている卯月ちゃんに代わり、僕が答えた。

「一応書生なんで、義信さんの代わりに」

「今、一之瀬さんにそんなことしてもらってる場合じゃないですからね」

白井さんは納得、という感じで頷いた。

そうなのだが、毎日卯月ちゃんに眉間に皺を寄せた難しい顔をされていたのでは、店としてどうなのか。

義信の担当編集者の一人で、以前にも一度店に来た白井さんは、義信の著者校が終わるのを、店でコーヒーを飲みながら待っていた。原稿は書いてすぐにメールで送れるが、ゲラは紙なのでメールでは送れない。

大変ですね、と僕が言うと、今日は午後から出社することになっていたのでいいんです、一度こんなふうに油を売ってみたかったんです、と眼鏡の奥の目を細めて微笑む。朝から印刷所に寄って、その足でうちに来たのだそうだ。

僕が会社が潰れたのでここの手伝いをしていると言うと、「出版社も潰れる時代ですからね」とため息をついた。

「ノルマがないだけまだいいですけど……」

「え、編集さんにノルマって何ですか？」

「年間十万部売れとか。一万部の本十冊でもいいし、一冊十万部でもいいらしいんですけど。そんなことを言う会社もあったみたいです。入社した頃に聞いた噂ですけど。ようは売れる本を作れってことですよね」

はあー。どこの業界も大変なのだな。

「うちはライトノベルはやってないんですよ。儲かると思って新規

参入するところはあるんでしょうが……」
うかつに新しいことに手を出して上手くいくとは限らない。白井さんは形のよい眉をひそめた。彼はいかにも文学青年という感じで線が細く、こう言うと悪いが、戦前だったらドイツ文学でも読みながら結核で死んでそうな感じの人だなと思う。
「でも、そういうのならアニメみたいで、内容は明快なんじゃないですか？」
「だと思います」
僕はとっくの昔に絶版になった義信のライトノベル時代の初期作品を思い出し、再び卯月ちゃんの代わりに答えた。送られてきた文庫本の中身を読んではいないが、どれもアニメのようなイラストが表紙になっていたし、おそらくアニメや少年漫画のように小中学生を対象にした内容なのだろう。
「僕も応募原稿を読んだりしますけど、たとえば若い女性が書いた恋愛小説なんかで、感性というか、感覚だけを頼りにポエムみたいな心理描写がえんえん続いたりするのを読むのは、男にはきついですよ」
「あー、そうですよね」
僕は卯月ちゃんが気に入って時々買ってくるようになった、「タヌポンクッキー」のココア味を小皿に入れて、白井さんに出した。いつの間にか店の庇の下にはタヌポンのイラスト入りの商店会のペナントが吊るされており、注意して見てみると近所の商店も同様にタヌポンだらけになっていた。シャッターや壁にイラストが入っている豪快な店まであり、さながらたぬきの町である。
さて、義信の奴、「三十分だけ待ってくれ」と言っていたが、はたして三十分で終わるのか。部屋には義信の焦りを表すかのような激しいビートのヘヴィメタルがかかっていたが、かえって集中出来ない気がする。
「ああー」
突如、卯月ちゃんが絶叫した。

「すいません、気が散ってしまいますよね」
腰の低い白井さんが卯月ちゃんに謝った。お客さんが店員に気を遣うってどんな店だ。
「違うんです。これ、前も読んだ気がするぅ」
「え、ちゃんと読んだやつハンコ押してるんだろ？」
「押してるよ。だから絶対読んでない原稿のはずなんだよ」
「読んだことのある本に似てるんじゃないですか？」
「ううん、二、三日前に読んだ原稿に似てるというか……『光と闇の聖戦』ってタイトルもなんか見たことあるような」
「どんな場面なんですか？」
「えっと、出生の秘密を知った主人公が、自分の存在理由について悩んでる」
それはまたえらい場面だな。
「主人公は呪われた力を持っててさ、生まれた時にその力が暴走して母親が死んじゃってるんだよ。どっかで見た気がするんだよな、この設定。どうせこの力で戦って世界を救うんだろうし」
「うーん、本当に似てるんじゃないですか。新人賞なんて似たような内容の作品もけっこうありますから。たまたま同じ箱に似たものが複数入っていても不思議じゃないです」
「そうなんだ……」
卯月ちゃんは今更ながら、引き受けたことを後悔していそうだった。
僕は白井さんが編集部のお土産にしたいと言った分の豆を挽いた。
「けど、もしかしたら自分が選んだ作品が受賞するかもしれないと思ったら、わくわくしませんか」
白井さんが励ますように言ったが、卯月ちゃんは黙ってうなだれていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6486y/

一之瀬珈琲店奮闘中／混戦中

2011年11月20日01時18分発行